

ゼロの劣等生

かんね

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゼロの使い魔のルイズの召喚に応じたのが、サイトではなく司波達也だったら？という私の想像です。

このSSで登場する達也は多少感情があります。

ゼロの使い魔と魔法科高校の劣等生の2作品は原作未読、アニメのみ。

このSSは自己満足によるものの為、批判文は受け付けておりません。

SS初書き、初投稿なので、ご容赦下さい（泣）

「ゼロの使い魔」や「魔法科高校の劣等生」の原作に詳しい方の中に、このSSを読んで気分を害された、という方が多く存在します。

このSSを見て頂く際には、十分にお気をつけてお読み下さい。

目次

一話	召喚の儀	1
一話	召喚の儀（達也視点）	5
二話	ルイズと達也の邂逅	8
三話	達也の勝利条件	12
四話	早朝の稽古	16
五話	達也の大人対応	20
六話	朝食	24
七話	それぞれの悪巧み	28
八話	決闘	31

一話 召喚の儀

ハルケギニア トリステイン魔法学院

トリステイン魔法学院の校庭で、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール、通称、ルイズ含む学生たちは進級試験である、召喚の儀を行なっている最中であつた。

現在までルイズは召喚しようとする度に爆発し、失敗している。

「(なんで何もでてこないのよ!これじゃ進級できないじゃない!!)」

ルイズが苛立ちを表にしながら、再び召喚のための詠唱を始めようとする、召喚の儀の監督役であるコルベールが、

「ミス・ヴァリエール、今回はここまでにしましょう。少し落ち着いてからした方が成功するかもしれませんよ?」

とルイズを諭す。

だがルイズが自分以外の生徒が使い魔を召喚できている状況で自分だけが使い魔がない事実など受け入れるはずがない。

「あつ、後もう一度だけさせて下さい!次でちゃんと成功させますので…」

「…分かりました。後一度だけですよ！」

許可を得てルイズは杖を空に向け詠唱を始めた。

「この宇宙のどこかにいる私の僕よ！最も強く、最も賢い、美しい何か！私の召喚に応えよ！」

次は失敗できないと考えると自然と魔力がこれまで以上に込められた。

詠唱が終わると同時に爆発が起こる。

また失敗か、と呆れた生徒たちはルイズに野次を飛ばした。

「やっぱりルイズはゼロのルイズかー！」

「何度やったって爆発しかないじゃん！」

そんな野次に言い返せないルイズだったが、砂塵が少しずつ収まっていくと、何かの影が映っていた。

「何かいるぞー！」

誰かが発したその言葉にルイズは自分の事ながら驚いていた。

生徒たちがその影に注視していると、その影が直立していることが分かった。

「立ってる！人間?！」

そのように騒めいているうちに、砂塵は完全に収まり、人の形が露わになる。

それは鋭い目元の整った容姿で大柄だが華奢な男性であった。

生徒たちに特に奇妙に思われたのが、服装である。今までに見たことの無いもので、少なくとも貴族ではないのが見てとれた。

「普通の平民…?」

「いや、なんか違いそう…」

その男性が放つ雰囲気は平民のものとは思えぬ程に、落ち着いており先程とは違った騒めきがおこる。

そんな騒めきを無視し、ルイズは

「あ、あなたは何者なの?」

男は顔に疑問を浮かべている。

そんなやり取りを見て、コルベールは自分の召喚の儀の監督役としての立場を思い出す。

「ミス・ヴァリエール、彼とコントラクト サークヴァントをするんだ」

ルイズは進級の為と自分に言い聞かせ、恥ずかしさを抑え、契約をするため、男の前に立つ。しかし身長が足りない。

「ち、ちよつとしゃがみなさいよ。貴族の私にこんなことされるなんて光栄に思いなさいよね!」

「ルイズ！その人多分、話してる事わかってないわよ！」

という声を聞いて、ルイズは手首を上下させ、男をしゃがませる。その瞬間、ルイズは口づけをしようとし、男は身を引こうとしたが、結果的にその口づけを受け入れた。

一話 召喚の儀（達也視点）

ちょうど睡眠に入るという時だった。

達也は自分の身の回りに異変がある事に気付いた。

だがその異変がどのような事象改変を起こそうとしているのか分からないため、何が起きてもいいように、術式補助演算機《CAD》を構える。

——達也の一瞬の気の緩み—— 達也は瞬きをしてしまった。

すると不意に皮膚に風を感じた。それは、外に移動させられたことを意味する。

「(どういう事だ。今まで家の中にいたはずだが……)」

などと考えていた達也は自分を中心とした爆発に巻き込まれた。

不意打ちで、爆発の無効化ができず、爆発を完全に無防備な状態でくらった。

幸い致命傷ではないが、外傷を負ったため、自己修復術式を一瞬で展開しダメージをなかつたことにする。

「(次から次へと……一体何をされている?)」

精霊の眼《エレメンタルサイト》を使って周囲の状況を見ると、明らかに達也がいた日本とは異なる土地であったため、何かしらの作用で、外国かどこか更に遠い場所に連れて来られたことを悟った。

またエレメンタルサイトを使い常時確認しているが、改めて達也の妹である深雪に何の異変が起こっていないことに安堵する。

「(どうやら俺だけが、この場所に強制的に連れてこられた様だな)」

何処かの国の戦略級魔法だとか、精神干渉系の魔法であればこんな事が可能かもしれない。

だがそのような類いの魔法を撃たれていたら、達也は気付かないはずがないと考えていた。

先程、達也は砂塵の向こうに数十人の人間が存在する事を確認しているため、その思考を止め、警戒を強めた。

砂塵が収まると、数十人の視線が達也に向けられる。

大人数から好奇の視線を向けられるというのは、普通不愉快なものだが、誰もが美少女と認める深雪と常に行動している達也にとっては、日常茶飯事である為、それを無視して敵意と戦力を見極めていた。

すると達也の三つ程、年が下のように見える桃色の髪の子が、何かしらの言語で話しかけてくる。

疑問を投げかけられていることは分かるが、内容がわからない。

「（この言語は何処のものなんだ？）」

と疑問を浮かべていると、その数十人の監督役であろう三十代後半と思われる男性が、その女の子に対し、何かを促し、その言葉を受けその子が頬を赤らめ、達也に向かって来ていた。

そして、その子はまた何か言っているようだが、やはり全くもって理解できない。しばらくして、その事が分かったのか、身振り手振りで「しゃがめ」と言われている気がしたので、しゃがんだ。

と、しゃがんだ瞬間、顔が近づいてくる。

そして、唇と唇が重なる前、達也は魔法を検知した。そのため最初は避けようとしたが、その魔法の効果の1つが『言語の習得』であったので、仕方なく受け入れる事にした。

二話 ルイズと達也の邂逅

契約の口づけを受け入れた達也であるが、契約の魔法の全てを受け入れたわけではない。

契約の効果の1つである、『言語の習得』これのみを残し、他の効果は術式解体《グラムデモリツション》で無効化した。

この事実気付く者はコルベール以外、誰一人としていなかったが、コルベールはかなり動揺していた。

これで使い魔が出来た思っているルイズは、口づけの恥ずかしさも消え、達也に問いかける。

「あんたは何者？どこから来たわけ？」

ルイズの言う言葉を理解でき、達也は安堵する。

同時に、ルイズの「来たわけ？」と言う言い回しと、『言語の習得』という効果を持つ魔法をかけられた事実から、自分がこの場にいる原因はこの子である事が分かつ

た。

「(こんな効果の術式がある事は初めて知ったが、これでやつと意思の疎通が可能になる訳か……)」

「司波達也だ。国立魔法大学付属第一高等学校に所属している。日本から来た。」

「ん？にほん？どこ、そこ？適当なこと言つてんじやないわよ！」

このルイズの反応にほとんど感情の起伏がない達也も少し戸惑う。

「(日本を知らない国か……明らかに厄介な匂いしかししないのだが)」

「なら、一体此処は何処なんだ？」

「聞いて驚きなさい？ここはトリステイン王国、トリステイン魔法学院よ！」

この聞いたこともない国名を聞いて、達也は珍しく夢であつてほしいと思つた。

そんな達也の思いもつゆ知らず、達也に興味を惹かれたキュルケことキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーは問いかける。

「あなたつて、平民よね？見たところ貴族つて訳でもないだろうし」

「括りとしては、平民という事になるのかもしれないな(平民？階級制度があるのか？)」

達也がそう反応する事で、達也とルイズのやり取りを静かに見ていた生徒たちは、再びルイズに野次を飛ばす。

「平民を召喚するなんて、さすがゼロのルイズ！」

「人間の使い魔なんて前代未聞だぞ！」

そんな野次に耐えかねたルイズは、逃げるように達也を自分の部屋に連れて行くとする。

「うるさいわね！しばたつや？だつたわね？付いて来なさい！」

「そうだが、まだ聞きたい事がある。

使い魔とはなんだ？語意的に、余り良い印象を受けないのだが……」

当然、達也は「使い魔」という単語から意味は推察できたが、確認のためにも問いかける。

「はあ。いい？よく聴きなさい？」

使い魔っていうのは、簡単に言えば私の僕よ！私を守ったり、身の回りの世話をするのよ！光栄に思いなさい？」

「断る。俺には自分の為にも守らなければならぬ人がいる。直ぐに日本に帰らなければならぬ。」

達也が即答したため、ルイズも負けじと対抗する。

「はい？帰れるわけないでしょ！もう契約の口づけをして、私の使い魔なんだから！」

「ああ、あの口づけをした時の魔法か？『言語の習得』以外の効果は全て消させてもらっ

た。その使い魔というのも、その打ち消した効果の1つだったんだろうな。

恐らく、その監督者もその事に気づいている」

今度はコルベールに視線が集まるが、コルベールは苦々しい面持ちで黙って頷く。

「どういうこと?!何をしたらそんなことが可能な?!」

「じゃあ、試しにもう一度やってみるか?」

最初の口づけは、「契約の為」と割り切っていた、ルイズは2度目の達也との口づけを想像すると恥ずかしくなり顔を赤く染める。

「そんなのそつちから頼まれてもお断りよ!」

達也に明らかにからかわれ、少しイライラし始めるが、同時にルイズは達也がまだ自分の使い魔ではない事を考えると

「(こんなやつでも、使い魔になってくれないと進級できないじゃない!)」

と、焦るのだった。

三話 達也の勝利条件

達也はこれまでのやり取りで、

このトリスティン王国には『平民』と『貴族』という身分が確立している程に強固な身分制度が存在することが分かっていった。

そんな中で「ルイズ」と呼ばれる子は、その性格やこれまでの立ち振る舞いを見る限りその『貴族』にあたるものだと考えた。

そして今、達也は帰る手段の手立ても、状況もいまいちまだ掴めていない。しかも今までの主な情報提供者である、四葉家も今は使えない。

よって『貴族』であるだろう「ルイズの家」から帰るための情報提供をさせることが達也の「ルイズ」とのやり取りの勝利条件となった。

「ルイズ？で合っているか？」

「ええそうよ。名乗ってないと思うんだけど」

「野次で聞いたから分かる。」

ルイズ、お前は使い魔が必要なのか？」

「おっしやる通りよ。使い魔がいないと進級もできないのよ……」

「一つの条件を飲んでくれるのなら、使い魔という名の下で、俺はルイズの守護者をやってもいい。」

これ以上の譲歩はできないが」

達也に「正式な使い魔にはならない」と間接的に言われ、ルイズは唸り、コルベールに視線で意見を求める。

それに答えるべく、コルベールが

「正式な使い魔でしか認めません」と言おうとした瞬間、達也は殺気立った視線をコルベールに向ける。コルベールは達也に対する恐れを本能的に感じたため、

「きよ、許可します」

と不本意ながら許しを出す。

達也に雰囲気で圧倒されたコルベールは生徒たちの視線に居心地が悪くなり、すぐさま

「こ、これで召喚の儀を終えます」

と言って逃げるように去っていった。

そして生徒たちは、それぞれの使い魔と交流した後、皆自分の部屋に戻っていった。

夜になって召喚の儀による学校全体の騒がしさも落ち着いてくると、ルイズは改めて進級が決まって、ホツとした一方で、達也が求める条件に少しヒヤヒヤし始めた。

普段なら嫌なことからは、逃げるルイズだが、ここで逃げると達也に負けた気になるのでルイズは達也にその条件を聞く事を決心した。

「で、今日言ってた条件って何よ？」

と恐る恐る達也に尋ねる。

「ルイズの家は貴族だな？ 貴族であるルイズの家に俺の帰る方法を調べてもらうことだ。」

「帰る？ わたしにあんたを異世界人と認めろと？ ……というか、何でわたしが貴族ってこと知ってるのよ！」

「お前達のこれまでの立ち振る舞いを見たらお前達がその『貴族』である事は直ぐ分かる。特にルイズ、お前は分かり易かった。」

達也はルイズを「高飛車で子供っぽい」ルイズの性質を示唆して言ったが、ルイズは達也に褒められたと勘違いする。

「そ、そう！ わたしの溢れんばかりの高貴な貴族オーラがあんたにも感じられたのね？」

「ああ。(…誤解している様だが、まあいい。)」

と、誤解したままの方が好都合に思い、達也は話を続ける。

「話を本題に戻すが、俺が所謂、異世界人であることは別に信じなくてもいい。ただ、お前の家に俺が日本に帰る方法を調べさせてくれ。」

「そう。それだけなら条件を飲むわ。」

達也の提示した条件が情報提供である事に、ルイズは安堵したのか

「じゃあ、私はもう寝るわ」

と言いながら、服を脱ぎ下着姿になるルイズに、達也は焦る様なことはなかったが、不用心だなど思うのだった。

ルイズが寝た頃、達也は転移させられた瞬間を思い出し、後悔していた。

「俺を日本から此処に転移させた起動式さえ見ていれば、今頃には戻れていたかもしれない。」

と普段ならあり得ない、「仮定の話」を出す。

そのことで、自分が精神的に疲れていることに気づき、達也もまた睡眠に入るのであった。

四話 早朝の稽古

達也の朝はとても早い。

日本にいた先日までは、早朝に八雲の下で体術の稽古をしていたが、トリステイン王国にいる現在は、達也の脳内の仮想敵の動きに合わせて稽古をしていた。

そんな稽古中の達也の動きは、余りに人間離れで、舞のような美しさも兼ね備えていた。

そんな達也の姿を見ていた柔らかな雰囲気を持つ、黒髪の女の子は、達也の動きに見惚れていた。

「誰かに見られているが、中断する必要もないだろう」

と達也はその黒髪の女の子の視線を無視し、稽古を続けた。

達也が稽古を終えると、その黒髪の女の子が近づいてきた。

「あつ…あの、このタオル使ってくださいい！」

と、達也にタオルを差し出す。

達也は、この子が自分の稽古を見ていた事を知っていたので、予め自分の為に用意してしてくれたことをここで理解した。

「ありがとう。使わせてもらおう」

達也は普段なら、稽古後には汗を皮膚と服から分解するのだが、この様な場面でそんな無粋な事はしない。

「さっきの動きは、すごかったです！」

私もう、目を奪われちゃってまじまじと見てしまいました。あれは一体何なのですか??」

と、少女は首をかしげる。

「さっきのは、単なる体術の稽古だ。早朝に稽古をするのが俺の日課なんだ。

君はこんな朝早くから何をするつもりだったんだ？偶然、起きたわけでもないだろう

「？」

と達也に言われ、何かを思い出したようで、

「あつー!!洗濯、忘れてました!どうしよう。これじゃ朝の準備に間に合わない!」

と慌てふためく。そんな姿を見て、達也は救いの手を差し伸べる。

「そういう事なら、俺も手伝うぞ。俺にも責任があるからな。」

「そんな!責任だなんて。で…でも、ご好意に甘えてもよろしいですか?」

「ああ。全く問題ない。」

と達也が返すと、嬉しそうにその女の子は達也と洗濯をしに向かった。

洗濯をしている際中も、その女の子との会話は楽しげに進んだ。

「あ!そういうえば、まだ自己紹介をしていませんでしたね。私はここで貴族の方々にご奉仕している、シエスタです。そのままシエスタと呼んでください!」

とシエスタは達也に柔らかな笑みを浮かべ、達也に視線を向ける。

「俺は司波達也だ。達也と呼んでくれ。」

「んー。あつ、ということは、ミスヴァリエールに召喚の儀で呼ばれた、あのしばたつやさんですか！

それなら、学院中で達也さんの話で持ちきりになるのも理解できました！」

「なぜ理解できたのか気になるが、話が広まっているのか……」

「はい！高身長で爽やかな男の人が呼ばれたっていう話でしたよ。そんな女の子たちの反応に、男の子たちは達也さんに嫉妬しているとのことでしたよ？」

とシエスタが嬉しそうに話すが、達也は

「そうか。」

と苦笑いで返すのだった。

五話 達也の大人対応

ルイズは育ち盛り真つ只中の16歳だ。

なので、多少起きるのが遅くても仕方ない（のだろうか？）。

ルイズは達也が起きてから二時間経とうとした時間にやつと起きた。

「（そういえば、昨日召喚の儀をしたのよね。なんか夢みたいで、はるか昔のことに感じるわ）」

と思いつながらルイズは部屋を見渡すと、達也がいないことに気付いた。

「あいつ、まさか逃げたんじゃないでしょうね?！」

慌てて、部屋を飛び出そうとしたが、自分が下着姿だった事に気が付き、「危なかった」と安堵しながらも素早く服を着て、部屋を飛び出した。

「（見つけたら、ただじゃおかないんだから!）」

そんな事を考えながら、昨日、達也に興味を持っていたキュルケが、達也をたぶらかした可能性を考え、キュルケの部屋に向かう。

しかし、その行為も虚しく、

「何? あんた、使い魔に逃げられたの?」

とからかわれたので、無駄に恥をかいだ、とイライラが増すのだった。

ルイズが外に出ると、達也の後ろ姿を見つけ、逃げ出したのではないことに一瞬、安堵するが、直ぐに怒りに変わる。

近づいてみると、達也がメイドと楽しげな雰囲気で話しているのが分かった。

「何よ！わたしにはあんな態度を取るのに、メイドには優しいわけ？」

と怒りを露わにするように、ワザと音を立てて歩き達也の真後ろに立つ。

そんな雰囲気をつたわせたルイズに気づいたシエスタは驚きを浮かべ、

「つーた…達也さん、ミス ヴァリエールがいらつしやつてますよ？」

「ああ、ルイズか、おはよう」

と達也は挨拶をするが、その冷静さがまたルイズの怒りに油を注いだ。

「おはようじゃないわよ！あんた、何で部屋にいないわけ？私の使い魔でしょう!!」

「いや、使い魔というのは体裁的なもので、俺は『守護者』としての役目しかしないという条件だったはずだが？」

そう達也に返され、ルイズは昨日の達也とのやり取りを思い出し、渋い顔をする。

「分かったわよ！ならあんたは、私の着たものを洗濯するだけでいいわ！これ以上は引

かないわよ！（こいつの言うこと全て通つたら、しゃくだわ！）」

と、ルイズは無意識に達也に妥協点を示すことで、全て達也の思い通りになる事を防ぐようにする。

「（何故、そんな事をさせたがるんだ）」

と達也はルイズの要求に疑問を抱いていた。

そんな中、シエスタが二人の会話に割って入る。

「それなら、私がやりますよ？」

そんなシエスタの反応に、ルイズは、

「こいつがやらなきゃ意味がないのよ！」

と本音が出る。

「（ただの当てつけか…）」

達也は、これ以上自分の都合のいい状況を作り出すとルイズと自分の関係が悪化するという可能性を感じ、それと自分の手間を天秤にかけ達也は、

「分かった。毎日、ルイズの衣服を洗濯すればいいんだな？」

と、達也は自分の時間を犠牲にすることを選んだ。

その案が受け入れられたことに、ルイズは達也に勝利したように感じ、気分が一気に

治った。

そんなルイズの姿を見た2人は苦笑を浮かべるのだった。

六話 朝食

ルイズは達也を連れ、食堂のような縦長の広間に入る。

ルイズに続き達也も入ると、その広間には何十人と座れるであろう長机が二脚あり、その上には豪華な食事が用意されており、既に殆どの席は埋まっているように見えた。

他の生徒は、入ってきた達也に注目する。

噂で広まっていた達也の整った容姿を一目見ようとする女子達、そんな女子達の興味をかつさらっている達也に対する嫉妬が渦巻く男子達、両者の違いはあつても、注目しているのは同じだった。

これほど大多数の視線を集められ、

「俺が召喚された事が、それほど好奇心がそそられる事なのか？」

と、居心地が悪く感じていた。

部屋を長机に沿って進み、ルイズが長机の真ん中程まで来ると、二席続いて空いていた手前側の椅子に座った。それを見た達也は、同じようにルイズの隣に座ろうとする。

しかし、ルイズがそれを止めた。

「ここに座つていいのは、魔法が使える貴族だけよ！あんたは　こ・こ！！」
とルイズは指で自分の足元を指す。この発言で達也は困惑と同時に、自分の誤解を認識する。

「『魔法が使える貴族』？　どういう事だ？　トリステイン王国では、魔法が使える者が貴族で、そうでない者が平民なのか？」

この瞬間まで、達也は過去の日本の『平民』と『貴族』の違いを、ここトリステイン王国における『平民』と『貴族』の線引きに、重ねていた。そんな誤解が解けたのだつた。

「（そうなると、トリステイン王国の形式に則るならば、俺も『貴族』というわけか？）
と、達也の脳内では、嘲るようにそんな思考をしていた。

「俺も魔法を使うのだが……」
達也がそう言うのとルイズは間髪入れずに達也に怒鳴る。

「使い魔は普通ここにも入れないのに、特例としてあんたを入れてあげてるのよ！
それなのに嘘までつくわけ?!」

「今日の朝ごはんは抜きよ！あんたは、外にでも行つてなさい!!」
何を言つても、今のルイズには聞き入れてもらえないだろう、と考えた達也は、ルイ

ズに反論する事なく広間を出て行く。

そんな達也に対してルイズは、広間を出て行く達也を惜しそうに視線で追う女子達を睨むのだった。

達也が外に出て、この空いた時間に何をしようか考えていると、

「達也さん、今から食事ではないんですか？」

と背後からシエスタから声を掛けられた。

そんな純粹な疑問に達也は苦笑いで答える。

「ルイズを怒らせたようで、追い出されてしまった。」

「と言うことは、まだ朝ごはんを食べてないんですか？」

「ああ。」

「それなら洗濯を手伝ってもらったお礼に、朝ごはん用意しますよ！朝に稽古をされたんですし、食venaきやダメですもん！」

とシエスタが嬉しそうに提案する。

断る理由も無かった為、

「ああ。頼めるか？」

と受け入れる。それにシエスタは快く返事をして、達也を厨房に連れて行った。

日本にいた頃の達也の食事は普段、深雪が作っていた。深雪の料理の腕は高級料亭で出されてもおかしくないようなレベルであった為、達也の舌はかなり肥えていた。

それにも関わらず、厨房で出された料理はそれと遜色のない美味さだった。そのため、それを料理人に素直に伝えたと、気に入られたのか、「これからも来てくれ」と言われ達也はこれからの食事に困る事は無くなるのだった。

七話 それぞれの悪巧み

達也は朝食を食べ終わると、シエスタと料理人にお礼を告げ、厨房を出た。その時、ちようどルイズが外に達也を探しに来ていたため、自然と合流することとなった。

他の生徒たちは、それぞれの使い魔たちと思われる生物と戯れており、それが目に入った達也は、ルイズに問いかける。

「ここは魔法学院なんだよな？ 授業は何時から始まるんだ？」

「そうよ。だけど、今日は授業はないわ。使い魔との交流をするためにね。」

「なら、俺たちはどうするんだ？」

「そのテーブルでティータイムにしましょう。それなら時間も潰せるわ。」

ルイズの提案によってティータイムー紅茶を飲むことになったのだった。

そんな2人のティータイムが始まって5分程経つと、達也に女子達の視線が集まっていた。

達也が紅茶を飲む姿はどこか気品があり、『貴族』以上に貴族の雰囲気があつ

た。

その為、貴族である生徒の中にも、そんな達也の姿に憧れる者さえいた。

その中の一人が、モンモランシーこと、モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシーであった。

モンモランシーには、ボーイフレンドのギーシュ・ド・グラモン、通称 ギーシュがいる。

そんなモンモランシーの姿を見たギーシュは、懸命に彼女の気を引こうとあらゆる手を尽くすが、無念に失敗し、逆恨みのように達也に怒りを向ける。

そしてギーシュは策を瞬時に練った。

「みんなの前で一对一の決闘であいつを無様に倒せば、あいつの評価も駄々下がりだろう」

そんな悪巧みをするギーシュだったが、普通、平民を一方的に魔法で攻撃することで、モンモランシーのギーシュに対する評価が下がる事が先に浮かぶだろう。

しかし、それ以上に達也に対する嫉妬と怒りが強く、冷静に考えることが出来なかった。

「おい！その平民！お前に決闘を申し込む！」

と、ギーシュが達也に怒りのこもった視線を送る。

「何故、そんなことになった？というか、この男は誰だ？」

と達也がごく当然に浮かぶ疑問をルイズに小声で問う。

そんな達也にルイズは、

「有力な名門グラモン伯爵家の息子の『青銅』の二つ名を持つギーシュよ。多分、隣にいるモンモランシーがあんたに気を引かれてる事が原因よ。」

と、冷静に分析する。

「(とんだ八つ当たりじゃないか。)」

そんな風に考えた達也だったが、1つ疑問が生じた。

「こいつは、青銅を生み出せるのか？」

「そうよ。だからそう呼ばれてるんじゃない！」

そんなルイズの返事を聞いて、何か思いついたように達也は悪魔も恐れるような笑みを浮かべるのだった。

八話 決闘

達也は日本で術式補助演算機《CAD》に關しての世界最高峰の技術力を持つ「トラス・シルバー」の「シルバー」としての役目を担っていた。極端に言えば、達也は超の付く優秀な技術者だ。

そんな達也でも、CADの媒体である本体に用いられる様々な金属が調達出来ないトラスティン王国ではどうしようもなかった。

ここで突然だが、『青銅』とは銅(Cu)を主成分としたスズ(Sn)との合金である。そしてそのどちらも、用途が広く、CADの一部に用いられる金属でもあった。

そんな中、思ってもいない所に、『青銅』を生み出せるギーシュという「銅とスズの生産工場」を見つけた達也は、ギーシュの何倍も性質が悪い考えを浮かべた。

「ギーシュ？お前は俺との決闘で何を望む？」

「この僕に謝罪しまたえ。いい気になっていたとなー」

「(何に対する謝罪なのか分からんが、どうでもいい。)」

「ああ、分かった。その代わりに俺が勝つたら、俺が望んだ時に望んだ量だけの『青銅』を

創ってもらおうか。」

そんな達也の発言も冷静ではないギーシュから見れば、舐められていると感ずるだけであった。

「この僕に勝つつもりでいるのか？生意気な！いいだろう。万が一、いや億が一でもありえないが、受け入れてやろう。」

そんなギーシュと達也の周りに話を聞きつけた沢山の見物客が集まる。その見物客達は達也が無様にやられるのを期待して見に来た者と、達也の身を案じている者の二つに分かれてた。

その達也の身を案じる側にルイズはいた。

ギーシュは『青銅』の二つ名を持つ程に、優秀な生徒であった為、ルイズの不安は当然のものだった。

「僕はもう準備ができているが、君はいいかい？」

「ああ。いつでも始められる。」

達也がそう返した事で、決闘が始まる。

ギーシュと達也は向かい合って、約10メートル程の距離があった。

達也はその距離を約0.5秒で詰めることができる為、一瞬で決着を付けることも可能だった。

しかしギーシュの『青銅』の魔法を一度目にしておきたいという、達也の好奇心が、その手間を上回り、ギーシュの繰り出す魔法を待つ。

そしてギーシュは『青銅』の魔法を繰り出す。

「出でよ！我が僕、戦乙女《ワルキューレ》！」

そう叫ぶと、五体の人型の青緑色をした戦士が現れる。

現れたと同時に、ギーシュはその内の一体を達也に差し向ける。

達也は、向かって来ている一体を精霊の眼《エレメンタルサイト》を用いて詳細を調べた。

「あれの表皮は青銅で覆われているようだが、軽量化の為に中は空洞のようだな。」

「(動きは……直線的すぎるな。ギーシュは体術の心得は持ち合わせていない?)」

これだけの情報を一瞬も掛けず処理し、真っ直ぐ達也に向かつて来ていた一体の戦士の懐に入り、手刀でその胴を「切断」した。

そんな予想外の状況に周りが驚きの声を上げる。

ギーシュも同じく驚いていたが、すかさず残りの4体で達也を囲むように命じる。

その命令通り、戦士達は達也を囲むことに成功する。

そんな状況でも達也は冷静に対処する。

片手を地に固定し、片脚を伸ばし360°回転することで、4体の戦士は足払いされる。

戦士達は不意に両足が宙に浮いた為、地に倒れる。

そんな4体の戦士達は達也は、素手で素早く丁寧に壊していくのであった。

そして残りの4体が、青銅の塊と化した状況を見て、あっさりとギーシュは敗北を認めた。

決闘が終わり、達也はルイズに話しかけられる。

「あ、あんた、すごい力あるのね。青銅を素手で切るなんて、めちやくちやよ！」

青銅を素手で切ったことに、相当驚いていたのである。ルイズは少し興奮していた。「確かに、あの戦士の中身が全て青銅だったなら、俺も素手で「切断」もできなかっただろうな。だが、あの戦士達の中は空洞だ。それなら少し工夫すれば誰でも出来る。」

「(そんなの出来るわけないじゃない!)」

と達也に文句を浮かべながらも、自分が召喚した達也がギーシュ以上に優秀だと分かり、かなり達也の評価が上がった。

そして、この日を境にしてルイズは度々、達也を「あんた」呼びではなく「達也」と呼ぶ場面があった。